

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本

絵本を読む

想像力



増田喜昭

ます よしあき／子どもの本専
門店「メリーゴーランド」店主。
著書に『子どもの本屋、全力投
球！』『子どもの本屋はメリーゴー
ランド』（共に晶文社）、
『子どものスイッチ』（共著、雲母
書房）など。

ページをめぐる。お客様が乗つてくる。がたじと、
がたじと、列車は街をぬけ、橋を渡り、トンネルく
ぐり、山を越える。駅に着く。お客様が降りる。また
新しい客が乗つてくる。がたじと、がたじと、ひた
すら列車は走る。

とまあ、それが二度繰り返される絵本なのだが、
この「がたじ」と「ぞろぞろ」の絵に、たっぷり
しかけが隠されているのだ。

しっかりと、乗客ひとりひとりの特徴を憶えてお
かなこと、最初の『おくやま駅』に着いたときに後
悔する」となる。

乗客がみーんな動物に変身しているので。「あ
れへ、いのリュックの馬の人、あのねじとくじやな
い？」「くえー、アロハのおじさん、熊なんだ」「け
ん玉の子ども、犬になつてゐるぞ」……てな具合に、
先へ進むどいのが、乗り込んだページにもどりて、
誰がどんな服装していたか、どんなカバン持つてた
か、顔は……と、もう一度確認しなくてはいけない。
確認どころよりも、発見かな。何度も見返しても、そ
のたびに新しい発見があつて、みつけると、嬉しいく
て、つい誰かに報告したくなるのだ。
だから、「子ども達とワイワイ」の絵本であるの

おきやくがのりまわ ゾベぞる ゾウゾウ
がたじと ガたじと
がたじと ガたじと
がたじと ガたじと
おきやくがおりまわ ゾロぞり ゾロぞろ

ページをめぐる。お客様が乗つてくる。がたじと、
がたじと、ほり、ろくろつ首になつてるよー」見
れば、女の子と同じ柄の着物を着ているではないか、
なるほど、涙がボツンと描かれてる。

ところ具合だ。僕たちは、乗客ひとりひとりのア
ラマを語り、なかなか先へ進まない。なんといつて
も、くぐるつ首になつた駄は、まだぶたつめの駄で、
乗客みんながおばけになつているのだ。

がたじと、がたじとの風景は、どんどん過激さを
増してゆく。川の水はまつ赤になり、はず池の鯉は
飛びはね、電がとどつく。やがて、橋のたもとで帽
子に着物のおじさんが釣りをしてる。「あら、明
治時代？」と思えば、富士の山、浮世絵の東海道。
着いたところは、『チャンバラ騒』。サムライ、忍者、
お姫様と盛りだくさん。

飽きた」とがなじ。絵を眺めるところのは、ほん
とは想像力だ。絵の細部に、いろんなしかけを見つ
けるのは楽しいのだけれど、絵に描かれていないと
ころまで、勝手に物語を作つて、それを楽しむのは
読み手たちだ。子どもは、その達人だ。一緒に読む
と発見がある。だから、絵本作家たちはその達人た
ちで、いつも挑戦している。